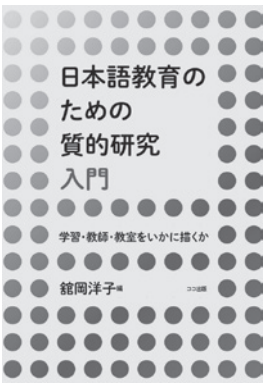
書　評



舘岡洋子編著

日本語教育のための質的研究入門

学習・教師・教室をいかに描くか

ココ出版、2015 年発行、408p.
ISBN：978-4-904595-68-8

岡本　能里子

1. はじめに

グローバル化の進展によるヒトの移動に伴い、日本社会も多言語多文化化している。確実に少子高齢化へと急速に進む日本社会は、これらの異なる言語文化の人々とコミュニケーションを行い、協働していく必要性が増大している。このような状況に呼応し、日本語教育の対象となる学習者およびそのフィールドも益々多様化が進んでいる。それぞれの場で求められる日本語も異なっているはずであり、この急激な変化は、必然的に日本語の学習観、教育観や日本語教育研究の捉え直しを迫る。「生活者としての日本語」のあり方への注目や、社会に参加し、共に日本社会を創っていくための日本語のあり方が議論され、研究されるようになったのは、当然のことだろう。

本書は、各筆者が、このような複雑な「個」が他者との関係を紡いでいく多様な「場」に身を置き、「量的研究」ではこぼれ落ちてしまいそうな「リアリティ」を捉えようとするプロセスをできる限り丁寧に提示することを試みる。近年多様な学問分野で注目されるライフストーリー（三代 2015）や会話分析（サックス・シェグロフ・ジェファソン　2010）など、様々な「質的研究」の方法を通し、自らの実践を読者にわかりやすい文体で語りかける。正に実践から理論が立ち上がる瞬間を感じることができる「質的研究の入門書」である。

2．本章の概要

本章は、大きく 3 部に分かれ、16 本の実践研究論文で構成されている。第 1 部では、「質的研究」が生まれた背景や理念について 5 本の論文を通して解説される。続く第 2 部の「個をとらえる質的研究」には、多様な学習者や教師に焦点が置かれた実践研究が 6 本まとめられている。第 3 部は、「場をとらえる質的研究」とし、様々なクラス活動や大学や地域日本語教室など、異なる場で展開される実践に光をあてた論文 5 本がおさめられている。最後に、「質的研究」についての「入門書」を中心に著書が紹介されている。「個」と「場」

に分けることに疑問を感じる面もあるかもしれないが、筆者たちが、「何をめざし、何のために研究するのか、自らがフィールドをどう捉えるのか、見たいものは何か」を問うていく本書の目的にそった無理のない章立てとなっている。それぞれが自身の実践を振り返り、またこれまでに書き上げた論文を省察し、新たに得た知見を提示していく。すべての論文が、その実践と研究の振り返りと往還のプロセスをふんで、次の課題に開かれた意欲的な論考となっている。よって、大変詳細で「分厚い記述」であり、16 本すべての論文それぞれに対し、詳しく考察する事は紙幅の都合上、また筆者の力不足により難しいため、3 部それぞれの中で注目したい点を中心に概観したい。

まず、第 1 部第 1 章の舘岡論文では、筆者自身の 20 年におよぶ読解教育を振り返り、読後の量的に測定できる成果に焦点をあてた方法への限界から、個人の理解ではなく対話を通した理解のプロセスの必要性に気づき、質的研究に取り組むことになった経緯が述べられる。その自身の体験をもとに、質的研究が生まれてきた背景と多様な質的研究方法について簡潔且つポイントをおさえて解説し、質的研究の共通の特徴を①日常的で自然な場面の重視②実証主義的な認識論への懐疑③プロセスおよび関係性の重視④帰納的⑤意味やナラティヴへの注目⑥観察者と観察対象者の相互作用や社会的相互行為の重視⑦実践や現場の変革を志向の 7 点に整理している。また、日本語教育学で多く採用されてきた「理論応用型」研究に対し、「実践から立ち上がる理論」（細川 2012）の必要性が質的研究と繋がっていることを示す。質的研究をふまえた日本語教育の実践研究の基礎を理解する上でも続く章を読み解く上でも助けとなる 1 章である。2 章の八木論文は、中国からの移住者調査の中で「いとこ」を「妹」と紹介することの意味を考えることをきっかけに、言語の「意味」の研究から意味の領域をもつ人間の研究の必要性に気づき、人間の精神や意味を扱う研究には実証的な量的研究は馴染まないことを説明する。その上で、量か質かといった二項対立的な捉え方ではなく、それぞれの研究の目的に合った研究へのアプローチの必要性を強調し、良い研究のチェックリストを具体的に提案する。3 章の広瀬論文では、質的研究が「世界を見る見方や、そこへどのようにアプローチするかという方法の変革にかかわっている」（p.57）ことを指摘し、日本語教育で質的研究を考える上での 3 つの問いを提示する。その上で、量的研究と質的研究のみならず、質的研究にも多様性があり、その中での対立軸を明確にし、「透明な私」ではなく、むしろ自身の教育観・言語観を明確に位置づけることの重要性を主張する。この「私」の捉え方は続く市嶋論文とも重なり、客観的な観察者としての研究者を超えて、学習者と「共在する者」として実践を構成することが不可欠であるとする。最後の三代論文は、第 2 部にも取り上げられるライフストーリー研究に至った経緯を、自身の実践研究を振り返り説明している。その上で多様な「声」にどのように応答していくのか、その「応答責任」を引き受ける覚悟が必要であることを指摘する。

第 1 部の各論文は、「実践から立ち上がる理論」とはどのようなものかを考える序章となっており、第 2 部と第 3 部の実践研究へとバトンタッチされる。第 2 部冒頭の 2 つの論文はライフストーリーとライフヒストリー研究である。佐藤論文では、嘗ての教え子へのライフストーリーにおいて、語られても見えなくなっていた「反ストーリー」があることに気づき、三代の述べた「応答責任」を未来への責任として捉え、最後に今後の実践に向

かうことの意志が示される。これは鄭論文で鄭が「日本語人生」と名づけたライフヒストリーを聴く実践とも重なる。「正しい日本語」を批判的に論じた修士論文が完成しても「私は嬉しくありませんでした」と述べた鄭のまっすぐな「声」に、母語話者からは想像できない「正しい日本語」への違和感とそこからの開放に取り組み、葛藤した日々の重さが深く埋め込まれており、ハッとさせられる。日本語、ひいては言語が、人間にとってどういうものなのか、言語教育に関わるすべての人の心へ投げられた直球の問いかけがそこにある。私自身がそのボールを真正面から受け止め、相手の心に届くよう応答するためにどれだけ葛藤をしてきたのだろうかと立ち尽くす思いがした。続く太田の関わった子どもが語られなかった、語れなかった事と子どものアイデンティティーの関係への問い、様々な研究方法を模索してライフストーリーに辿り着いた尾関論文がふれた、話を聴くことから得られる表情や声から発信される意味の重要性、鈴木論文の「比喩生成課題」を通して知る言語運用能力によって測れない存在への気づきが伝えられる。継続して科学研究費研究に採択され深めてきた研究実績をもとに、PAC 分析の留意点を紹介した小澤・坪根論文では、質的研究が、日本語を母語とした日本語教師の可能性に拓かれていることが紹介されている。このように、第 2 部は、質的研究が「個」とことばとの関係や人間とことばとの関係に新たな視点や広がりを与える力があることを、各自の実践研究と筆者の「声」を通して伝えることに成功している。

第 3 部の「場」に注目した論考では、古屋・金・武が、教室活動において実践をストーリーとして語ることを「教育＝実践」のあり方として探究する意義を示し、豊かな教育実践の場をデザインしていく重要な方法である事を主張する。崔論文では、観察法についてその落とし穴も含めて、詳しくその手順を説明し、他者の教育実践を観察法によって研究することで、「教室という場」で起きているすべてのことがありのまま研究できることの魅力を伝える。野々口論文では自身の地域日本語教室での「対話的問題提起学習」において、会話を書き起こし、自身の論文のプロセスを丁寧に振り返る。その上で、教師としての自身に何が必要かを問い直す事が教育改善と教師の力量形成に意義があることを示す。続く岩田論文は、野々口論文同様、教室でのやりとりを細かく書き起こす会話分析の方法を先行研究をふまえてわかりやすく説明し、教室の会話連鎖の分析からでは見えなかった学習者がなぜその発言をしたのかを知るための分析へと研究が変化していったプロセスを明らかにする。その成果をふまえ、はじめて会話分析の視点を取り入れて作成した教室活動のための教材（初鹿野・岩田 2012）に結実させたことの意義を述べる。最後の牛窪論文は、「よりよい日本語教育のあり方を議論することを目的として、実践研究を考えることも可能なはず」（p.343）だとし、学習者がどのように授業を捉えているかの調査を通して「日本語授業そのものの枠組みを変えていくこと」と、教師が自身の授業を自己完結的に改善するのではなく、共に学習者に向き合う教師間で、それぞれが発見したことの共有を進めていくことの重要性を提案する。筆者自身は既に、同僚たちと各自の授業のあり方を根本から見直す勉強会を開始し、それが今では様々な教育機関の日本語教師が集う研究会へと発展しているという。このような内発的な勉強会が「学習の実践共同体」へと成長することを期待したい。

３．本書の意義

編者の舘岡は、どこから読み始めても良いと述べているが、先述したとおり、第１部の舘岡論文から最後の牛窪論文まで、入門者に対してスムーズに読み通せるよう工夫されている。最後に入門書を中心に「文献紹介」が配置されている事も、質的研究をはじめようとする人にとって大きな助けとなり、読み手に配慮された構成になっているといえよう。２節で述べたとおり、筆者それぞれの失敗や迷いも明らかにし、それぞれの熱い思いをわかりやすい表現で語りかける。そのやさしい語りの中に、悩みつつも果敢に目の前の「個」と「場」に向き合い、より良い日本語教育のあり方を提供したいと真摯に模索する姿が見出せる。本来私たちは、複数のカテゴリーに属し、複数のカテゴリーの接合点として存在している。そのような実践研究の「場」としての「個」においては、各論文で何度も言及されている「実践者=研究者」の学習観、言語観、言語教育観への省察と更新が常に求められる。それを忍耐強くまた、希望をもって引き受けていくことは、教育実践者であり研究者であるという複数の役割を担う日本語教育に関わる私たちの課題である。これまで述べたとおり、それぞれの論考に、複雑な要素が交錯する動態的な「個」と「場」に向き合い、試行錯誤を繰り返しつつ、「実践から立ち上がる理論」を模索し続ける豊かなプロセスが見事に提示されている。その意欲と熱意に圧倒される思いがした。

捉えたかと思うと逃げてしまう動態的な「個」と「場」を前に、日々立ち止まり、葛藤する日本語教育関係者に、質的研究の醍醐味を伝え、確かな力を与えてくれる論集である。

４．今後の課題

今後の課題をあえて述べるとしたら、質的研究に辿り着いた時代の流れやその背景については、どうしても類似している状況が繰り返し述べられることになるため、ややその点に冗長性を覚える読者もあるだろう。帰納的な研究では、それぞれの研究の背景や動機、プロセスを丁寧に述べる必要があるため、難しい点だと思う。次に、自らの実践とこれまでの研究に省察を加え、真摯に向き合う熱い思いがあることや、「実践や現場の変革」を目指しているという強い使命感が感じられることから、時には、深く入り込みすぎてしまう危険性も垣間見える。更に、量的研究との比較が繰り返されるため、量的研究を否定しているわけではないということも述べられているが、「実践研究は、量的研究では行なえない」という印象を与えてしまうかもしれない。

「実践研究の意義を、他の実践に影響を与え，日本語教育のあり方をよりよいものにすることと考えるならば，実践の成功事例を報告するだけではなく、実践にまつわる課題を現場の教師が議論するための研究が必要です」（p.365）という牛窪の思いにもあるとおり、筆者同士は、恐らく日頃からそのような場を確保しているのではないかと推察される。そうであるなら、筆者同士がそれぞれの論文についてコメントしたり語り合う章があってもおもしろかったかもしれない。この論集が、実践や現場の変革を目指し、議論を巻き起こす第１ステージとなるために、日本語教育の量的研究者からのコメントや議論の場もデザインしてみてはどうだろう。そうれば、質的研究の足腰が強化されていくのではないかと、

本書の熱い思いに触発され、ついそこまで期待してしまった。

実践研究としては、『イマ×ココ』が（2012、2013、2014、2015）発表の場を提供し、その成果を掲載した実践研究論集も刊行されている。佐々木他（2015）にも日本語教育の実践が紹介されている。本論集に託された思いを持続させ、目の前の「個」と「場」に常に向き合い、それぞれが自ら見出した質的研究方法を問い直し、次の課題に挑戦していっていただきたい。そのような思いが、更なる議論を巻き起こし、日本語教育現場の確実で持続可能な変革の運動へとつながるものと確信する。第 2 ステージの刊行が楽しみである。

参考文献

イマ×ココ編集委員会編（2012）（2013）（2014）（2015）『イマ×ココ』ココ出版
佐々木倫子・岡田英夫・鈴木理子・ローズ（平田）明子（2015）『日本語教育の現場から–言葉を学ぶ・教える場を豊かにする 50 の実践–』ココ出版
サックス、H・シェグロフ、H.A.・ジェファソン, G.（2010）『会話分析基本論集』（西阪仰訳）世界思想社
初鹿野阿れ・岩田夏穂（2012）『にほんご会話上手–聞き上手・話し上手になるコミュニケーションのコツ 15』アスク出版
細川英雄（2012）『「ことばの市民」になる–言語文化教育学の思想と実践–』ココ出版
三代純平編（2015）『日本穂教育学としてのライフストーリー語りを聞く、書くということ』くろしお出版

（おかもと　のりこ　東京国際大学国際関係学部）